

国際交流研修旅行のあり方について

A Study of the Ideal Way of International Exchange Study Tour

島宗 俊郎

Toshiro Shimamune

西川 三恵子

Mieko Nishikawa

目 次

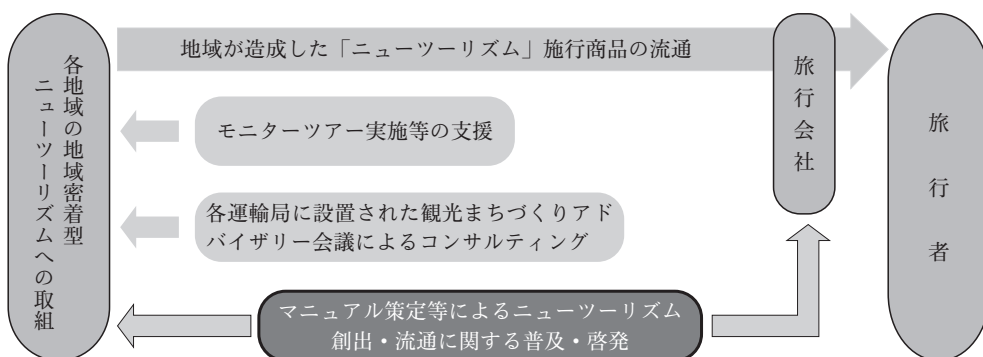
- I. はじめに
- II. わが国における修学旅行の変遷
- III. 本学における国際交流研修旅行の取り組み
- IV. 考察
- V. おわりに

キーワード：国際交流、研修旅行、互敬・共敬

I. はじめに

近年、旅行は個人化・多様化しており、旅行会社が企画・立案したパッケージ旅行で得られる感激・感動だけでは物足らず、今や旅行者自らが企画・参加する旅行でより、さらに感謝を盛り込めるとニーズは高く、現在、各学校で取り組まれている修学旅行についても例外ではない。

観光庁によると厳密な定義づけはできないとしながらも、従来の物見遊山的な観光旅行に対して、テーマ性が強く、体験型・交流型の要素を取り入れた新しい形態の旅行をニューツーリズムとし、新たな旅行形態の概念を示唆している。



図表1 ニューツーリズム（観光庁 HP より）

さらに国際交流となると、自らの五感で異文化を感じるにより、互いの社会を享受しつつ、互いを理解しあってこそ成り立つものである。劉（2004、P27）は「自らの肌で触れ、体験することで得られる感動こそが、学習、成長における最高のパターンであり、その中でも、国際教育交流は非常に重要な役割を担っている。若い世代の国際教育旅行活動は、まさに国際教育交流を発展させるための契機なのである」と述べており、グローバルな視野を身につけるためには欠かすことのできない要素であると言える。

本研究では、本学で実際に行なっているアジア研修の報告とともに、国際交流研修旅行のあり方について若干の考察を加え、今後の研修旅行について言及したい。

II. わが国における修学旅行の変遷

データブック 教育旅行年報によると、修学旅行の始まりと言われるのは、1886（明治19）年、東京師範学校の「長途遠足」であり、「行軍」の計画に対して「学術研究」及び「教育」的配慮を加えて千葉県下を実施したものであり、学制公布された1872（明治5）年から14年後のことであった。

海外修学旅行の初めは、1896（明治29）年に、兵庫県立豊岡中学校が東北アジア方面へ、長崎県立商業学校が上海方面に実施されている。

1903（明治34）年には、自学自習を生かす修学旅行として、明石女子師範学校が「生徒に課題を持たせた研究旅行として修学旅行を行い、事後にグループごとの研究報告会を持った」とされる。

1940（昭和15）年、文部省は修学旅行の制限を通牒。

1946（昭和21）年には修学旅行が徐々に復活され始める。

1958（昭和33）年8月、学校教育法施行規則の一部が改正され、小・中学校の『学習指導要領』に「学校行事等」が位置づけられ、ここで修学旅行は中学校で「学校が計画し、実施する教育活動」となった。なお実施は1960（昭和35）年からである。

1968（昭和43）年10月には、「小学校・中学校・高等学校等の遠足・修学旅行について」修学旅行は教育課程上に位置づけられた教育活動であるから、「そのねらいを明確にし、その内容をじゅうぶん吟味して、教育的効果を高めるようにすること」「その計画と実施にあたって学校の創意と教育的識見をじゅうぶん生かし、いわゆる物見遊山や観光旅行に終わらせないようにすること」と文部省通達されている。

1969（昭和44）年には、修学旅行は「特別活動」の「修学旅行的行事」として位置づけられ、「平素と異なる生活環境の中であって、見聞を広めるとともに、楽しく豊かな集団行動を行なうことにより、集団生活のきまり、公衆道徳などについての望ましい体験を積むような活動にすること。」と文部省から示され、1972（昭和47）年から実施された。

補足として、海外に目を転じて見ると、近代ツーリズムの創始者と言われるトーマス・

クック（Thomas Cook 英）が、1841年にラフバラーで行なわれる禁酒運動大会に参加する禁酒運動メンバーのため、レスターからラフバラーの地までの往復貸切の臨時列車を運行するよう鉄道会社に働きかけ、団体旅行を手掛ける会社を作るきっかけとなり、今に続く会社の祖として世界に名を轟かせている。

Ⅲ．本学における国際交流研修旅行の取り組み

本学では従来よりアジア見聞をテーマに併設の名古屋産業大学学生も任意参加できる観光ビジネスコースの研修プログラムが実施されており、2007（平成 19）年には旅行社が企画・立案した韓国ソウルの観光地を巡る研修旅行（参加学生 23 名）を実行したが、2008（平成 20）年に、本学園の姉妹校であるソウルの HANGARAM 高校を訪問し、趣旨説明を行なったところ、同高校に日本語を学ぶコースがあったことから快く賛同してくださり、翌 2009（平成 21）年から同高校生と本学学生との交流プログラムを取り入れた研修旅行（参加学生 20 名）が実施されることとなった。

交流にはスポーツ交流、文化的交流などさまざまな交流手法があるが、本学ではソウル在住の高校生の日常生活を共に過ごすことで、現地の街に自らを溶け込ませ、その街の文化に触れる観光交流を試みた。

2009 年の訪韓初日、仁川国際空港に到着した後、ソウルに向けて移動する途中に初めて立ち寄った韓国料理店は本学留学生の卒業生の実家が経営する店であり、現地の家族にとっても歓待され、学生同士に面識はないが同窓生という共通点で交流が芽生え、国際交流研修旅行のスタートとなった。

右に示すのは 2010 年 2 月に実施（参加学生 19 名）した時の日程表（図表 2）である。

名古屋経営短期大学 韓国研修ツアー

日次	月日	都市名	時間	交通機関	内 容	食 事
①	2月22日(月)	中部国際 発 仁川 着	午前 昼頃	KE/NH 専用車 専用車	中部国際空港指定カウンター集合 大韓航空又は全日空機にて一路、仁川へ（機内にて軽食） 入国通関手続き、現地ガイドの出迎えを受け、ソウル市内へ 市内レストランにて昼食（サムギョブサル）、ソウル市内観光（景福宮、民族博物館、青瓦＝車窓など） 観光後、ホテルチェックイン 夕食は市内レストランにて（海鮮鍋） 〈ソウル泊〉	朝：機内 昼：○ 夕：○
②	2月23日(火)	ソウル滞在		混載車 専用車	朝食は市内レストランにて韓定食 朝食後、板門店ツアーバス乗車場所へ 終日、板門店ツアー参加（混載ツアーへの参加）（途中、昼食） 夕食は市内レストランにて（カルビ 1.5 人前＋冷麺） 〈ソウル泊〉	朝：○ 昼：○ 夕：○
③	2月24日(水)	ソウル滞在		専用車	朝食はホテルにて 終日：フリータイム （現地学生との交流内容については追って手配） 夕食はご自身にて 〈ソウル泊〉	朝：○ 昼：× 夕：×
④	2月25日(木)	仁川 発 中部国際 着	夜 夜	KE/NH	朝食はホテルにて 出発までフリータイム（お部屋の利用は正午まで） 帰国準備後、食料品店でのショッピング後、空港へ 大韓航空又は全日空機にて一路、帰国の途に（機内にて軽食） 入国通関手続き後、解散	朝：○ 昼：× 夕：機内

図表 2 日程表（2010 年 2 月）

2009 年の最大の目的であった現地の高校生との交流プログラムを行なったが、

- ・本学学生へ出発前に韓国について 3 つの質問（図表 3）をしたが、韓国や韓国語をほとんど理解できていない
- ・現地高校生は日本語を学習しているとはいえ、初対面で短時間に上手くコミュニケーションが図られるか（双方 2 名ずつの合わせて 4 名を 1 グループとした）
- ・本学学生の宿泊ホテルを出発・ゴールとし、実質 4 時間半でランチを取りながら現地高校生の普段着の時間を過ごせるか

などが不安材料として挙げられていたが、本学学生は交流終了後、高校生が皆優しく、一生懸命にコミュニケーションを取る努力をしてくれたと一様に述べ、当初の不安は払拭され、交流プログラムの第一歩を痛感した（図表 3・4）。

出発前のアンケート		
★ 韓国のイメージを一言で言い表して下さい		
1	キムチ、海苔、焼肉が美味しい。	2
2	外国から観光に来る人が多い	1
3	ニギヤカナ国	1
4	美容で有名、肉の料理が多い	1
5	物価が安い	1
6	皆髪型が同じである	1
7	日本に近いイメージ	1
8	商品が安い	1
9	凄く発展している国	1
10	円高	1
★ 韓国人のイメージを一言で表して下さい		
1	肌がきれい	3
2	皆顔が似ている	2
3	美人	2
4	日本人に似ていると思う	1
5	唇が若干厚め	1
6	基本整形	1
7	綺麗	1
8	スタイルが良い	1
9	辛い物が好き	1
10	頑張る人が多い	1
11	早口	1
★ 韓国語を知っている限り書いて下さい		
1	アニヨンハセヨ	3
2	サランヘヨ	3
3	ジョセヨ	2
4	アニオンハシムカ	1
5	カムサハムニダ	1
6	ケンチャナヨ	1
7	マッシソヨ	1

（原文まま）

図表 3 事前アンケート結果

交流後のアンケート		
1	とっても良い子と思った	2
2	すごく日本語が上手でした	2
3	優しかった	2
4	親切であった	2
5	とても照れ屋さん	1
6	一生懸命日本語を理解しようとしてくれて嬉しかった	1
7	帰国女子で英語がペラペラで韓国人って感じがしなかった。	1
8	言葉が通じないと必死になってくれて嬉しかった	1
9	辞書を使ったり、日本語を話そうと一生懸命で親切だった	1
10	すごくかわいくて良い子と思った	1
11	すごく気に掛けてくれたり、一生懸命話掛けてくれようとしてくれた。	1
12	良い印象を持ちました	1

（原文まま）

図表 4 事後アンケート結果

交流研修の2年目となる2009年6月には文部科学省の大学教育・学生支援推進事業 学生支援推進プログラムの一環として韓国研修旅行も加えていただき、国際交流プログラムはさらに充実した内容が計画できたため、出発前の2009年10月に現地ガイド（琴玉姫氏）をお招きし、本学学生の学生生活の実態を理解してもらうこととした。従来、現地ガイドとは空港に到着してから帰国するまでの時間を共有するだけに過ぎず、隣国とは言え価値観の違いから理解し合えないことも多々ある。例えば、韓国は儒教の教えから年長者を敬い、先生を先生様と呼び、先生の日として敬う慣習があるなど、韓国と日本では文化が違うことを実感してもらうためであった。実際、この事前プログラムも学生・ガイド双方に良い効果をもたらした。

現地ガイドと学生はソウルで再会となるので、互いに懐かしさや親しみを感じながら、和やかに研修プログラムを進めて行けたことは大きな収穫であったと言える。

さらに、毎年続けて同じ現地ガイドに依頼するため、徐々に本学学生や引率教員の気質も理解し始めてくれ、お互い気の置けない関係の交流が続けられていることは言うまでもないことである。

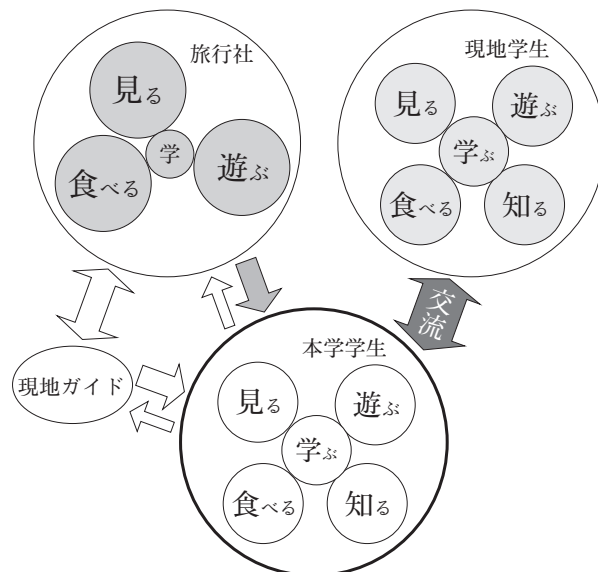
IV. 考察

以上は、本学の4年に亘る国際交流研修旅行の実態をまとめたものであるため、すべてを言い表すことはできないが、わずかながらも現代における旅行像のあり方について実感できたことは確かである。

従来の観光型旅行は、旅行社と教員が企画・立案し実行され、参加者は「見る・食べる・遊ぶ」型であったが、現在の主流は「見る・知る・学ぶ」型に交流がプラスされたテーマ性を持った体験学習型へと変化してきている。

図表5の関連イメージ図は、筆者が描いている交流をプラスした体験学習型研修旅行の関連図である。

従来は、現地ガイドを通じて『見る、遊ぶ、食べる、学ぶ』



図表5 交流関連図

を体験するだけに過ぎないが、ここに交流というベクトルが加わるにより、『見る、遊ぶ、食べる、知る、学ぶ』という双方同じ大きさの感動を体験でき、さらなる感動・感激・感謝の気持ちが生じると言える。

体験学習型では、個々人で自ら設定した目標を現地で実体験することで、達成感・満足感を味わうことができ、充実した研修という意識が芽生える。

本学プログラムの交流では即興のグループ行動が求められたが、互いを思いやる気持ちで接しあうことで、心の友情を育み、共に時間を共有しあうことができた。

V. おわりに

筆者（島宗）は、30年間、留学カウンセラーとしての一面も持ちながら、本学ではビジネス観光コースの非常勤講師として授業に携わり、その中で異文化交流のあり方について模索し続けていた。

特に日本人が海外に留学する際にはホームステイ型の留学が主流だが、ホームステイ先には同年代の子どもがいることは少なく、むしろ老夫婦または小学生以下の子どもがいる家庭が多く、また日本では自分の娘が海外にホームステイする場合、ホームステイ先に同世代の男性がいないことを望むケースが多くみられ、留学する学生には同年代との交流が少なからず必要であろうと感じていた。

そこで、本学のアジア研修では同年代学生の異文化交流プログラムが実現でき、わずかであるが、双方に互敬・共敬の念を生み出すことができたのではないかと痛感する。

互敬・共敬とは筆者の造語であるが、文化の違いや価値観の違いなどによる意識のズレが誤解となり、軋轢を生じることになることも、互いが互いの違いを認識し、理解しあう気持ちや相手を思いやることで互いの心に芽生える相手への敬愛の念が生ずることを指すものである。

さらに今後の取り組みとして

- ・海外では市街地・観光地ばかりを見学するのではなく、名所・旧跡を深く掘り下げ、文化や歴史の観点からも学ぶことを取り入れたい
- ・現地学生との双方向理解の実現として、訪韓プログラムと同様の訪日プログラムを実現させ、再会交流の場を設けたい
- ・交流プログラムでは観光地を見るだけのプログラムではなく、互いに語り合う時間を共有し、異文化理解につなげたい
- ・互いの文化を理解し合えば、自分の将来において、世界には違う文化・歴史・習慣があり、他国の同年代の人を通して異文化を体験することができれば、それは必ず平和への第一歩となり、自分の人間としての幅を広くすることは間違いないと確信する

などが挙げられる。

これからも国際交流研修旅行を体験者の学生目線で充実した内容が提供できるよう研鑽していきたいと考えている。

謝辞

国際交流研修旅行の交流プログラムにご賛同いただいている姉妹校 HANGARAM 高校の校長先生ならびに生徒指導に尽力くださった日本語教員の金先生、毎年同プログラムに積極的にご参加くださっている高校生の皆さん方に対して、心より御礼感謝の意を表します。

引用文献

観光庁 施策 観光産業ニューツーリズム創出・流通促進事業

http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/sangyou/new_tourism.html 2010.12.22

劉 永順「観光 11」高校生の国際教育旅行の理念と現況 日本観光協会 2004 P27

参考資料

「海外教育旅行ガイド 2009」株式会社トラベルジャーナル 2009

「データブック 教育旅行年報 2010.10」(財)日本修学旅行協会 2010

ピアーズ・ブレンドン著 石井昭夫訳「トマス・クック物語・近代ツーリズムの創始者」株式会社中央公論社 1995

本城靖久「トマス・クックの旅」株式会社講談社 1996

水野俊平「ソウルで学ぼう」株式会社岩波書店 2006

山口 誠「ニッポンの海外旅行」株式会社筑摩書房 2010